

2

サステナブルキャンパスを目指して

～ 4つの柱で快適なキャンパスライフを～

千葉大学では、脱炭素・循環型・自然共生・安心安全を柱としたサステナブルキャンパスを目指しています。また、キャンパス内の学生や教職員だけでなく、大学の日々の生活に関連する事業者も環境に配慮した取り組みを進めています。

p.26 脱炭素キャンパスを目指して

p.28 循環型キャンパスを目指して

p.32 自然共生キャンパスを目指して

p.33 安心安全キャンパスを目指して

p.35 大学を支える事業者のSDGs・環境への取り組み

脱炭素キャンパスを目指して

千葉大学では、2022年に「キャンパスマスタープラン 2022」を策定し (p.10)、このマスタープランに沿って、「省エネ・創エネによるエコキャンパスの実現」に取り組んでいます。



エネルギー消費量の推移

二酸化炭素等の温室効果ガスは電気などの各種エネルギーの利用による排出量がほとんどの割合を占めることから、温室効果ガス削減計画についてはエネルギーの省エネ行動計画及び目標に準じることとし、エネルギー使用量の削減を推進することで低炭素キャンパスを目指しています。

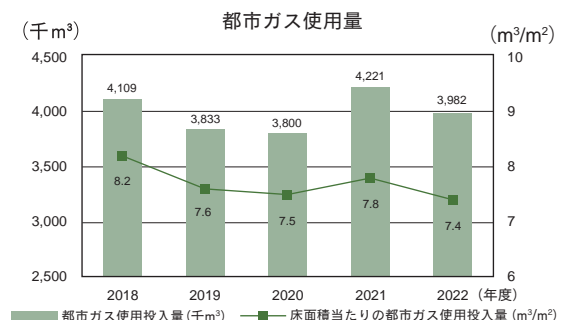
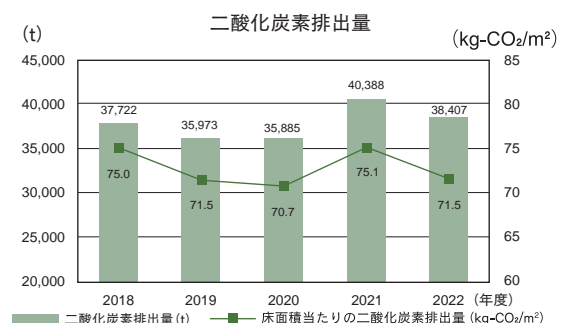
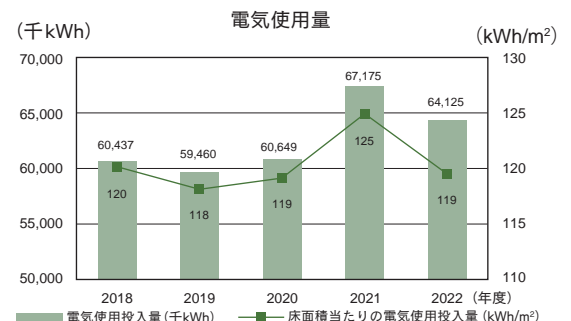
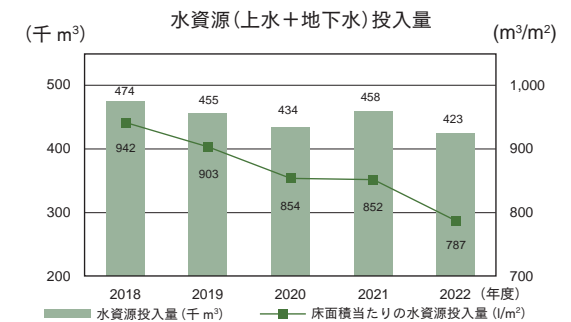
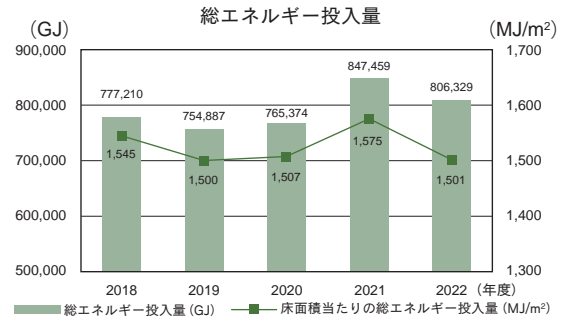
2022年度の千葉大学の総エネルギー投入量は806,329GJで前年度比4.9%減（電気は64,125 kWhで前年度比4.5%減、ガスは3,982千m³で前年度比5.7%減）でした。エネルギー原単位は1,501MJ/m²となり、前年度比4.7%の減少でした。水資源投入量は前年度比7.7%減少、二酸化炭素排出量は前年度比4.9%減となりました。

過去5年度のエネルギー原単位 (MJ/m²) をみると、2018年度1,545、2019年度1,500、2020年度1,507、2021年度1,575、2022年度1,501と推移しています。省エネ法で求められている“5年間平均原単位を年1%以上低減する”との目標に対しては99.4%となり目標まではあとわずかです。過去5年間の推移をみると、2021年度の上昇率は際立って高いですが、2022年度は大幅な削減を達成しているため、今後も省エネへの取り組みを継続していくことが肝要です。

地区別の総エネルギー投入量 (GJ)

	2019年度	2022年度	占める割合 (2022年度)	コロナ前 (2019年度) との比較
西千葉地区	214,996	202,001	25%	94%
松戸地区	36,135	35,345	4%	98%
柏の葉地区	20,521	23,821	3%	116%
亥鼻地区	153,039	173,263	21%	113%
附属病院	330,196	365,779	45%	111%
墨田地区	-	6,120	1%	-
大学全体	754,887	806,329	100%	107%

環境パフォーマンス詳細データおよび環境意識アンケートの詳細結果については大学ウェブサイトに掲載



学生・教職員の省エネ意識について

2023年4～6月に学生・教職員を対象に行った環境意識アンケート(回答数2,026名)によると、「省エネに配慮した生活を送っていますか?」という質問に対して、「いつも意識している」と回答した割合は49.0%、「たまに意識している」は39.3%でした。約9割の人が省エネを意識していることがわかりましたが、「いつも意識」する人が増えるように啓発を継続していきます。

エネルギー管理システム(CEMS)とエコ・サポート制度の運用

千葉大学では「エネルギー管理方針」を策定し、管理組織を整備し、各部局に省エネリーダーを配置し、部局ごとに省エネ目標・行動計画を立て、教職員の省エネ意識の向上と省エネ活動を推進しています。また、部局・建物ごとの電気・ガス・上水・井水の毎月の使用状況を3年度比較のグラフにしたエネルギーレビューを学内ホームページに掲載しています。さらに、電気使用状況をリアルタイムで計測して表示する「エネルギー管理システム(CEMS)」をWeb上で公開しています。これらの情報を活用してエネルギー使用の特徴を把握し、省エネに活用しています。

また、エネルギー効率が悪い冷蔵庫や空調機の機器更新、LED照明や網戸設置などの省エネ対策に対し、大学本部が費用を半額補助する「エコ・サポート制度」を運用しています。2022年度は、建物の事務室・研究室などの照明や外灯を省エネ効果の高いLED照明に更新する工事4件、フリーザー機器更新1件に対して約200万円の補助を実施しました。これにより、年間で電気使用量約13,511kWhの削減効果が見込まれます。



エネルギー管理システム

太陽光発電システムの導入

千葉大学では、キャンパスの脱炭素化を進めるとともに、災害時に教育・研究・医療活動を停止させないよう、自然資源を活用した再生可能エネルギーの創出に取り組み、1999年度より太陽光発電パネルを設置してきました。2022年度時点では19箇所20基、合わせて定格出力187.6kWが設置されており、月間平均の発電電力量は17,965kWhでした。

学生による省エネ啓発活動

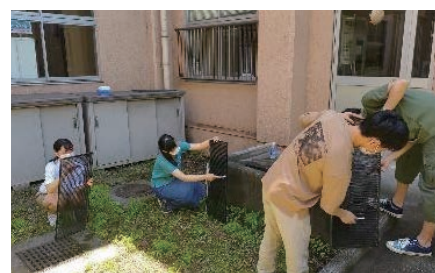
環境ISO学生委員会は、毎年7月に学内で省エネイベントを開催しています。意識啓発のために、うちの配布、自転車発電体験、省エネクイズなどを行っています。また、建物の各所に節電、節水と呼び掛けるステッカーを貼ったり、夏と冬にはポスターを掲示し、省エネと呼びかけています。



うちわ

エアコンフィルター清掃による省エネ活動

環境ISO学生委員会は、エアコンの効率を上げて消費電力を減らすことを目的として、教職員に夏前の時期にエアコンフィルターの清掃と呼びかけています。さらに、西千葉・亥鼻地区では時間的な問題で自主的な清掃が難しい研究室に対して、学生が有料で清掃を請け負う活動をしており、2022年度は148台のエアコンのフィルターを清掃しました。松戸・柏の葉地区では各研究室に清掃実施記録用紙を配布し清掃後に回収する方法で清掃を推進しました。



フィルターを清掃する様子

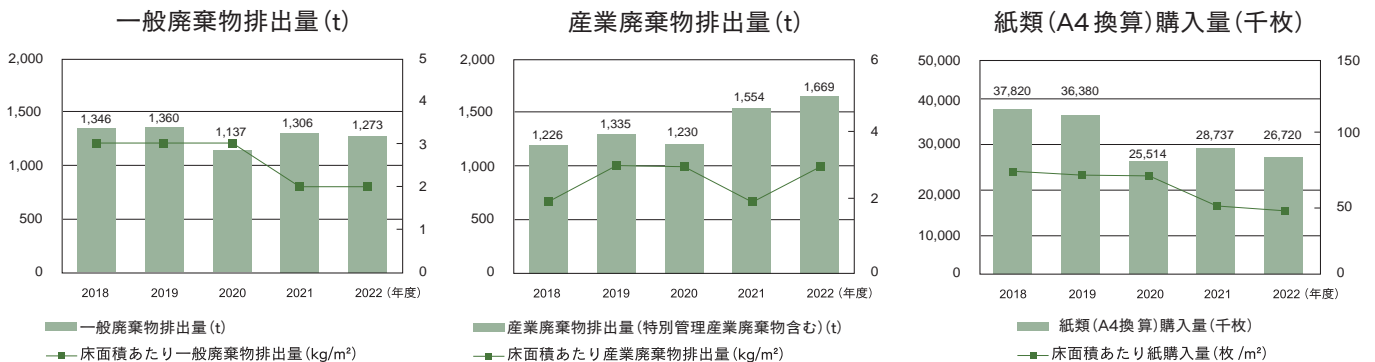
循環型キャンパスを目指して



資源を有効活用し、3R※を促進するため、廃棄物、紙、自転車に対して様々な取り組みを行っています。

廃棄物排出量、用紙の購入量の推移

2022年度の千葉大学での一般廃棄物排出量は1,273tで前年比2.5%減少し、また、産業廃棄物排出量は1,669tで前年度比7.4%増加しました。医学部の医学系総合研究棟への移転と、柏の葉地区の工事および引越しが主な要因です。2022年度の紙類(A4換算)購入量は、26,720枚で前年度比7.0%減少しました。前年度と比較して減少しており、省資源の意識が向上していることが分かります。また、2019年度と比較すると73%にとどまっており、オンラインツールの普及が省資源に貢献していることがわかります。



ごみ分別、古紙回収、裏紙利用の取り組み

千葉大学では可燃ごみ・資源ごみ・不燃ごみ・粗大ごみの4品目の分別を徹底しており、年に1回、環境ISO学生委員会が西千葉キャンパス内の全てのごみ箱の分別状況を調査しています。また、新聞・雑誌・段ボール・紙パックなどの資源古紙を分別・回収し、2017年度から有償売却を実施しています。資源古紙以外の紙袋・紙箱・包装紙などの“汚れがなく束ねられない紙ごみ”は「ミックス古紙」として分別・回収し、可燃ごみの総排出量の削減に貢献しています。ミックス古紙の回収費用は無料であるため経済的利点もあります。また、使用された紙のうち、裏が白い“裏紙”を専用ボックスにて回収・再利用しています。



学生用資源古紙回収ボックス

学生・教職員の紙資源の節約に対する意識

2023年4～6月に学生・教職員を対象に行った環境意識アンケート(回答数2,026名)によると、「普段からなるべくゴミを出さないことや、ゴミの正しい分別を意識していますか?」という質問に対して、「いつも意識している」と回答した割合は67%、「たまに意識している」は27%でした。94%の人が3Rを意識している結果となりました。また、「紙資源の節約を意識していますか?」という質問に対しては、「いつも意識している」が54%、「たまに意識している」は33%となり、87%の人が紙の節約を意識しているという結果でした。一方、「(西千葉・亥鼻キャンパスのみ)ミックス古紙の回収をご存じですか?」という質問に対し、「知っているし、利用している」は54%、「知っているが、利用していない」は15%、「知らない」は32%でした。さらに広く広報活動を行い、より多くの人に回収ボックスを利用してもらえる工夫が必要であると考えます。

※ 3R: Reduce(リデュース・発生抑制)、Reuse(リユース・再利用)、Recycle(リサイクル・再利用)

編集担当: 松本梨花(工学部3年)

❧ 千葉大学基金「古本募金」

千葉大学では、在学生・卒業生・教職員などから、古本・DVD・CDを寄付していただき、その売却利益で千葉大生を支援する取り組みがあります。回収の促進のために2017年3月より、附属図書館の総合カウンター左に専用のポストを設置しました。ポストでの回収は2023年3月時点で累計1,285冊となり、図書館で不要になった本の寄付も合わせると8,000冊以上寄付されています。



回収ポスト

❧ 附属図書館での図書リユース

附属図書館では、すでに図書館で所蔵している、内容的に古くなっている、などの理由で、廃棄する予定の図書を、除籍手続きを経たうえで、廃棄前に再利用する学内の教職員・学生対象の無償譲渡会を開催しています。2022年度は7月と1月の年2回開催しました。この取り組みは2006年から実施しており、平均すると約3,000冊の図書が1回の譲渡会の対象になり、そのうち6割程度が引き取られています。残った図書の一部は千葉大学基金（古本募金）に寄附しています。



図書リユースの会場の様子

❧ 学内リユース Web 掲示板

附教職員の間でリユースの輪を広げる場として、学内限定のリユース掲示板 (Kururi) の Web サイトがあります。教職員が公費で購入した物品が不要となった場合にその物品の情報を掲示板に公開することで、必要になった方が引き取ることができます。例年、インクカートリッジ・キャビネット・椅子などの事務用備品から、冷蔵庫・テレビ・プリンター・電子レンジなどの電化製品、応接セットや実験機などの家具、種類を問わず幅広い物品が廃棄されずにリユースされています。

❧ 古本市の開催

環境 ISO 学生委員会は、卒業する学生や退職する教職員などから不要になった本を回収し、格安で販売するイベントを2008年度から毎年開催しています。2022年度は3年ぶりに対面販売を実施しました。計882冊を回収、うち147冊を販売し、売上は39,850円でした。売上の返金を希望する本提供者には返金し、残りは寄付金として環境活動資金に充てます。売れ残った本は、障がい者就労支援を行っている一般社団法人ワーキングバリアフリーが運営するジョブポンプロジェクトに寄付しました。



古本市の様子

❧ プラスチックストローを廃止し、米ストローを導入

環境 ISO 学生委員会は、プラスチック使用量の削減と学生・教職員への環境意識啓発を目的に、大学生協のプラスチックストローの無料配布の中止、紙ストローや竹ストローを1本5円で有料販売する実証実験を2019年から2度にわたって行い、代替ストローの導入が決まりました。より単価の安いストローを探していたところ、米ストロー製造会社からご連絡をいただき、試用実験を経て6月に米ストローの本格導入に至りました。カラフルで耐久性があり、成分は米とコーンスターチのみであるため、食べても問題ありません。さらに、使用後は家畜のエサや植物の肥料などへと循環利用ができます。米ストローを使うことで、プラスチックを安易に使い捨て続ける社会に疑問を持ち、考える良いきっかけになることを願っています。



学内に掲示している米ストローのポスター

🔗 コンタクトレンズの空ケース回収リサイクル

環境 ISO 学生委員会では、2021 年から使い捨てコンタクトレンズの空ケースを回収するプロジェクトを開始しました。単発イベントでの回収を経て、2022 年度は生協店舗前に常設の回収箱を設置して回収しました。約 3,000 個集まった段階で空ケースを回収し、ゴミや汚れのないケースが混在していないか確認したうえで、「アイシティ eco プロジェクト」に送り、様々な製品にリサイクルされます。すでに 5,000 個以上を回収しました。今後は空ケースの回収・郵送だけでなく、活動の広報等も行う予定です。



回収した空ケース

🔗 落ち葉・生ゴミから堆肥をつくる

環境 ISO 学生委員会では、資源の有効活用及び環境負荷削減のため、キャンパス内の落ち葉や生協食堂からの生ゴミを乾燥させたものを利用して、「けやきの子」と名付けた堆肥を作製しています。地元の「NPO 法人環境ネット」から、堆肥化等検討会議（年 3 回）や堆肥勉強会（年 1 回）を通じて技術、知識の指導を受けているほか、堆肥を作製するピットの更新を共同で行いました。千葉市には整備の行き届いていない竹林があり、そこで切り出した竹を使用することで竹林整備にも貢献しました。完成した「けやきの子」は毎年地域住民の方に 10kg500 円で販売しており、2023 年 2 月には 19 名の方に計 350kg 販売しました。毎年購入して下さる方もおり、大変好評です。2023 年度からはピットを更新して廃棄する竹をチップ化して堆肥に混ぜて、有効活用することになりました。



堆肥ピットの様子

🔗 レジ袋有料制と利用率の推移

千葉大学生協同組合（以下生協）におけるレジ袋有料制（1 枚 5 円）は、環境 ISO 学生委員会の発案で始まりました。2005 年に実証実験を行い、2006 年度には西千葉キャンパスの店舗で、2007 年には全キャンパスで導入しました。有料化を経てレジ袋の利用者数は年々減少を続け、2019 年には無料配布に比べて約 80% の利用をカットすることができました。しかし、コロナ禍の 2020 年に最も少ない利用者数を記録してからは増加傾向にあり、2022 年は 5,457 人で、利用率は 1.2% でした。2023 年には、このレジ袋の利用状況について詳しくアンケートを行い、更なる削減に向けて新たな取り組みを行う予定です。



🔗 レジぶー基金の活用

レジぶー基金とは、レジ袋有料化により節減されたレジ袋購入代とレジ袋の販売収入を千葉大学生協から拠出していただいている基金です。環境 ISO 学生委員会はこの基金を活用し、学内の環境改善や環境啓発に関わる様々な企画を立案・実施しています。オリジナルのエコグッズをリーズナブルな価格で販売する「レジぶー企画」や、ライフセンターで使用できるクーポンを配布したり、発電体験の機会を提供したりして省エネの啓発を行う「省エネイベント」などに活用されています。

2022 年度には、ペットボトルの購入を控えてマイボトルを持ち歩く習慣をつけることを目的に、オリジナルデザインを施した折りたたみ水筒を販売しました。繰り返し使うことで、プラスチック容器処理に発生する二酸化炭素の放出を削減することに寄与します。2023 年 5 月から生協において、原価 700 円のところレジぶー基金を使って 1 本 300 円で販売しました。



販売ポスター

🔗 ラベルレスボトルの導入

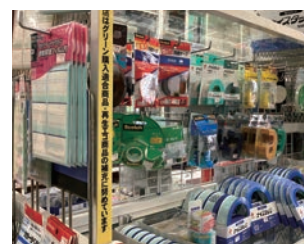
ラベルレスボトルとは、ペットボトルのラベルを付けずに販売するペットボトル飲料のことです。千葉大学では生協で販売されているペットボトル飲料を生協の協力のもとラベルレスボトルのものに変更しました。これにより、プラスチックごみの削減と、キャンパスを利用するすべての人が自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つ機会になります。



ラベルレスボトル製品の例

🔗 グリーン購入の促進

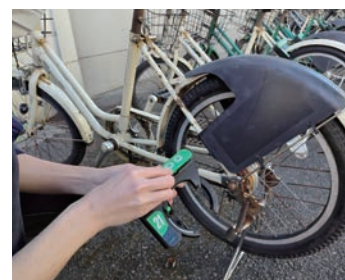
千葉大学では、グリーン購入法[※]の規定に基づいた「環境物品等の調達の推進を図るための方針」を、毎年度公表しています。これは環境物品等の市場を促進することを目的とした法律です。この中で、オフィス用品等の物品およびサービス 275 品目を特定調達物品として定め、その調達目標を 100%として管理しています。また、ショップ大和屋をはじめとする構内事業者においてはグリーン購入法適合製品の値札に「適合マーク」を表示しているほか、適合製品の購入に努めていることを表示するなど、購入の促進に取り組んでいます。



ショップ大和屋の商品棚

🔗 学内シェアサイクル COGOO の活用

西千葉キャンパスでは、構内の駐輪や放置自転車が緊急車両や歩行者の通行を妨げている問題を受け、自転車の台数削減のため、構内移動専用の自転車の持ち込みを禁止しています。それに伴い、実証実験として COGOO(コグー)を 2013 年に導入しました。COGOO はスマートフォンアプリから簡単に利用できるシェアサイクルサービスです。2022 年度には定期メンテナンスを継続させ、環境 ISO 学生委員会による協力もあり、学内の学生・教職員約 1700 名が登録するサービスになりました。シェアという考え方が広がり、大学構内における放置・廃棄自転車問題の解決と開放的なキャンパスの実現に貢献しています。



実際に使用されている COGOO

🔗 中古自転車の回収・譲渡活動

卒業やキャンパス移動、故障等を理由に大学の敷地内に放置される自転車が大きな問題となったことから、環境 ISO 学生委員会では 2007 年度から不要となった自転車を無料で回収するイベントを行っています。回収した自転車のうち状態の良いものは業者に修理をしてもらい、新入生や留学生などの希望者に修理費程度の価格で譲渡しています。2022 年度は西千葉・亥鼻キャンパスで、計 61 台の自転車を 4500 円均一でリユース販売しました。



自転車譲渡イベントの様子

※ グリーン購入法：国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律

編集担当：篠宮千里（園芸学部 3 年）、門野美佳（理学部 2 年）、鈴木結理（国際教養学部 4 年）

自然共生キャンパスを目指して

千葉大学は豊かな緑を活かして、自然と共生する持続可能なキャンパスを目指しています。



庭園と緑のテラスで自然との共生

国内の大学で唯一の園芸学部がある松戸キャンパスには1909年の創立以来作られたイタリア式、フランス式、イギリス風景式の3つの洋風庭園があります。植えられている草花や木々も異なり、四季折々の風景を楽しむことができるため、地域の方々も訪れる場所となっています。2019年に完成した附属図書館松戸分館は、既存建物の改修と新築の組み合わせにより、その接続部分に新たな空間を生み出すことで、既存建物の再価値化を図る等、貴重な資産を有効に活用しています。また、建設発生土を利用した、建物と一体的な利用を考えた「緑のテラス」を整備することで台地の頂上(水源)に位置するキャンパスの特性から雨水を一時的に貯留し時間をかけて地下へ浸透させ、豪雨時の被害を軽減させる等、環境を意識した試みを実施しています。



洋風庭園

学部棟前に学生主体で緑化活動

国際教養学部公認サークルLAS GARDENは、学部棟の花壇の維持・管理をしている団体です。当学部が開設された2016年当時、殺風景な学部棟周りの景観でした。そのため、「せっかくなので綺麗な花を咲かせて学部を盛り上げよう!」という学生の主体性のもと発足しました。地道な日々の水やり、盛大な春と秋の種まきを行うほか、過去にはハーブ類などの収穫祭、今年はキュウリなど野菜の栽培に挑戦しています。花壇や黒板を見た学生が写真を撮ったり、周囲の方々から激励や感動の声が寄せられたりと、環境活動を通し人と人が繋がる瞬間に大きな期待を持ち、地域の皆さんの溢れる笑顔のために日々尽力しております。



花壇にある黒板でメッセージを発信

育てて緑化フラワープランター

環境ISO学生委員会では「育てて緑化フラワープランター」という企画を実施しています。この企画は、景観の向上を目的に毎年秋に希望する部局に対して、プランター・苗・鉢底石・土・栽培マニュアルといった花を育てるのに必要なものを一式貸し出し、教職員が建物の入口などの見えやすい場所にプランターを置いて育てるものです。2022年度は学内の幅広い部局にパンジー432株を配布しました。パンジーは秋から春にかけて長い期間花を咲かせ、学内の景観向上に貢献しました。



フラワープランターの様子

緑のカーテンの作成

例年、環境ISO学生委員会は緑のカーテンを作成しています。緑のカーテンとは、つる性の植物をネット等に生い茂らせて文字通りカーテンのようにするものです。これにより、景観が改善するだけでなく夏場には周辺温度の低下にも役立ちます。結果として、緑のカーテンは設置された建物等の光熱費の削減にも繋がります。緑のカーテンを作成するためには水やりや雑草の除去等が必要なので、継続的な管理が求められます。昨年度は緑のカーテンとしてゴーヤとドリチョス・ラブラブを植えました。秋には実った果実の収穫も行いました。



緑のカーテンの様子

安心安全キャンパスを目指して



人体や環境に悪影響を及ぼす化学物質や喫煙に関して、千葉大学では総合安全衛生管理機構が中心となって、取り組んでいます。



化学物質の管理の徹底

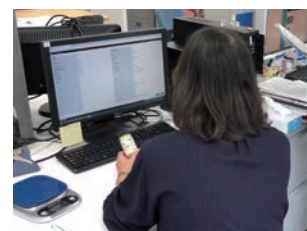
千葉大学では日々さまざまな化学物質を用いて多様な実験・研究が進められています。取り扱う化学物質には人体や生態系に悪影響を及ぼす可能性のある物質や、環境への影響が明らかになっていない物質もあります。各研究室においては化学物質を適正に管理・使用し、使用後も環境に負荷を与える恐れのないよう適切に廃棄するなどの処理を行っています。また、大学の環境マネジメントシステムの中でも、環境 ISO の研修での周知、チェックシートによる自己点検、環境 ISO 内部監査 (p.62) での現場確認など、さまざまな機会に化学物質の管理徹底の確認を行っています。



化学物質の保管の様子

千葉大学化学物質管理システム「ククリス」の運用

ククリス^{※1} (CUCRIS : Chiba University Chemical Registration Information System) とは、研究室で試薬・薬品等の化学物質を購入したときに、千葉大学独自のバーコードを発行・登録して、学内での化学物質の購入から廃棄までの一連の過程を把握する管理システムです。2007 年度に導入され、現在では 95% 程度の高い稼働率を維持しています。また、2013 年度から定期的に「化学物質の管理状況点検」を行い、総合安全衛生管理機構が試薬・薬品などの管理状況を確認しています。



ククリスを確認の様子

PRTR 法^{※2} 対象化学物質の収支

千葉大学では環境に影響を及ぼす恐れのある PRTR 物質 (462 物質) の集計を行いました。大半の試薬・薬品はククリスに登録されていたため集計作業の効率アップを図ることができました。2022 年度の PRTR 法の対象物質のうち、使用 (排出・移動) 量が 100kg 以上の物質は表の通りです。PRTR データは大学や事業所を含めて全国集計され、化学物質のリスク (エコチル調査 など環境リスク評価) に関する疫学調査^{※3}などにも利用される貴重な資料となります。

PRTR法対象物質使用(排出・移動)量				単位:kg
政令番号	対象物質名	入量	使用量	残量
127	クロロホルム ^{※1} ※2	7,462	4,091	3,371
392	ノルマル-ヘキサン ^{※1} ※2	5,492	3,523	1,969
80	キシレン ^{※2}	4,726	3,557	1,169
186	ジクロロメタン	2,030	1,200	830
13	アセトニトリル	1,232	426	806
411	ホルムアルデヒド	1,188	238	950
300	トルエン	760	132	628

※1-西千葉地区における届出対象物質

※2-亥鼻地区における届出対象物質

※1 ククリス：研究室で試薬・薬品等の化学物質を購入したときに、千葉大学独自のバーコードを発行・登録して、学内での化学物質の購入から廃棄までの一連の過程を把握する管理システム

※2 PRTR 法：特定化学物質の環境への排出量の把握および管理の改善の促進に関する法律の通称

※3 エコチル調査：環境省が 2011 年から実施している大規模な疫学調査「子どもの健康と環境に関する全国調査」

アルコールチェックの導入

2021年11月に「道路交通法施行規則の一部を改正する内閣府令」が公布され、2022年4月から業務として運転しようとする者及び運転を終了した者に対し、酒気帯びの有無を確認することが義務付けられました。また、酒気を目視やアルコール検知器で確認・記録し、その記録を1年間保存しておくことも義務化され、千葉大学でも公用車を運転する前と後に検知器で検査し、運転手とは別の者が確認を行うようにしています。



アルコール検知器

受動喫煙[※]防止環境の整備・禁煙サポート

千葉大学はこれまでも望まない受動喫煙を防止するため、喫煙所以外での喫煙は禁止とし、原則敷地内全面禁煙となっていました。2019年には健康増進法の一部を改正する法律の施行に伴い、受動喫煙状況の確認および行政の指導に基づき、さらに限定した「特定屋外喫煙場所(喫煙所)」を整備しました。西千葉地区は1カ所あった喫煙所を撤廃し、2023年4月1日よりキャンパス内全面禁煙となりました。松戸地区と柏の葉地区にはそれぞれ1カ所あり、亥鼻・附属病院地区は0カ所です。また、喫煙のリスクを周知するために、喫煙による身体への影響をまとめたポスターを喫煙所に掲示しています。学内での喫煙者は減っていますが、今後も喫煙所でのマナー向上や清掃活動、設置場所の変更や撤去など継続的な改善を図っていきます。また、総合安全衛生管理機構では、健康診断で喫煙者にパンフレットを配布し、「禁煙支援外来」を行っています。そこでは医師のサポートのもと、呼気の検査や体調管理、禁煙の仕方について説明を受けることができます。



2022年度末に撤去した西千葉地区の喫煙所

受動喫煙防止状況に関するアンケート結果

2023年4月～6月に学生・教職員を対象に行った環境意識アンケート(回答数2,026名)によると、「松戸キャンパスにおける、大学内の分煙環境や禁煙マナーに満足していますか?」に対して、「とても満足している」が69%、「やや満足している」が24%と満足している人が全体の92%でした。

※ 受動喫煙：たばこから立ち上がる煙や、たばこを吸った人が吐く息に含まれるたばこ煙にさらされること

コラム

健康と園芸のつながりを学ぶ場 ―看芸ガーデン―

「看芸ガーデン」とは亥鼻キャンパスの看護学部中庭にある小さな花壇のことで、看護学部と園芸学部が共に作る花壇として、亥鼻キャンパスの学生や教職員がメインで運営をし、園芸学部は月に一度訪れて管理しています。看芸ガーデンは、看護学生や医療関係者が植物に親しみ、園芸作業を行うことで療法的効果を実感し、その意義を学んでもらいたいとの願いが込められています。年に2回、テーマを決めてデザイン植栽していて、亥鼻キャンパスの皆さんの楽しみ、癒しの場となっています。2022年度は「五感を楽しむガーデン」と「春を祝う」でした。



「春を祝う」ガーデン

編集担当：松本梨花(工学部3年)

大学を支える事業者のSDGsへの取り組み

千葉大学では構内に事業所を持つ事業者も、EMSの構成員となり、大学と一緒に環境に取り組んでいます。それぞれの事業者に取り組むについて、環境ISO学生委員会がインタビューしました。



千葉大学生協 ブックセンター 瀧一馬店長

ブックセンターでは、SDGsに関連する書籍コーナーを設置し、学内での情報発信活動をお手伝いしています。SDGs関連の書籍も、人文学的な分野だけでなく、理工学的な分野まで学際的に幅広く取り扱っており、お客様が手に入りたい情報に適切にアクセスしやすいように本を並べています。

レジ袋は希望者のみに、適切な基準をクリアしたものを配布しています。さらに、売れ残りの本を業者に返却する契約をし、当店以外の店舗で必要としている方に届くシステムを採用するなど、廃棄物が少なくなるように意識しています。また、明るい時間は窓側の蛍光灯を使わない等、節電や節水などの省エネを心がけた店舗運営を行っています。



千葉大学生協 ライフセンター 櫻井翔太郎店長

全国大学生協連は組合員の参加を活発にし、協同体験を広げ、人と地球にやさしい持続可能な社会をつくることを基本的な使命としており、その理念はSDGsの基本理念「誰一人取り残さない」と重なりあうものです。ライフセンターでは1枚5円のレジ袋の売り上げを「レジぶー基金」(p.30)に提供しており、この基金は環境ISO学生委員会が行う様々な環境啓発活動に活用されています。また、エコグッズの販売や米스토ローの導入など、環境ISO学生委員会の企画に協力してSDGsに貢献しています。



千葉大学生協 フードコート (食堂) 吉田憲司店長

フードコートでは、環境への取り組みとして、生ごみをなるべく出さないようにメニュー構成を工夫しています。生ごみは環境ISO学生委員会の堆肥化活動(p.30)に利用し、ごみを減らしています。また、揚げ物などから多く排出される廃油はバイオ燃料にして再利用しています。さらに、コピーするときは裏紙を利用したり、機械の稼働時間を短くしたり、使わない時は電源を切ったりする取り組みによって省エネと光熱水費の節約にも力を入れています。



アエレカフェ 下田沙織店長

アエレカフェでは、テイクアウト用の容器に二酸化炭素排出量の少ないバイオプラスチックや紙容器を利用したり、紙ストローを導入したりすることで、環境への配慮を行っています。また、SDGsの様々な項目と結びつく食品ロスについては、日替わりのご飯を食数限定にすることでロスを極力なく取り組みをしています。今後もアエレカフェでは、環境に配慮し、皆様にとっての憩いの場所となれるように努力を続けて参ります。



編集担当: 福岡裕介 (工学部2年)、細山田直誠 (法政経学部2年)、門野美佳 (理学部2年)、横田里穂 (法政経学部2年)

🔗 ショップ大和屋 林功店長

ショップ大和屋は、千葉大学内の文房具店です。特別新しいことに手を出すのではなく、2004年より行ってきた環境に配慮した営業を19年もの間手を抜かずに継続的に行っていきます。講習会等には、環境ISOの活動を始めた当初である2004年から何度も参加し、正しい知識を身につけています。また、グリーン購入法適合商品の仕入れや紙ごみのリサイクルなどの基本的なことを含めていかに長く続けていくことができるかの重要性を会得し、実践しています。



🔗 キョウワプロテック株式会社

千葉大学ではさまざまな業務を委託する関連事業者にも、契約の際に環境配慮を要請しています。本レポートでは、毎年、関連事業者の1つに、環境ISO学生委員会の学生がインタビューを行っています。今回は、千葉大学内の清掃を担当して下さっている、キョウワプロテック株式会社の理事役千葉エリア統括MGの奈須正樹様と作業主任の川西久美子様取材しました。

—キョウワプロテック株式会社とはどのような会社ですか？

福島県に本店があり、今年で創業57年目になる会社です。「安心・安全・快適」という商品やサービスを通して、お客様により良い快適さと感動をお届けすることを目的として活動しております。現在は、グローバルな観点から次世代へと繋がる社会づくりに貢献することを目標とした事業展開を行っており、トータルファシリティマネジメント企業を目指しています。

—SDGs 貢献に向けて意識して取り組んでいることは何ですか？

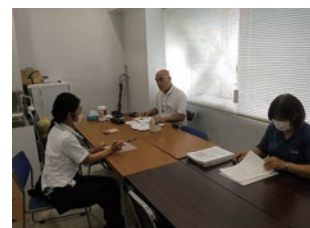
私たちもISO14001は取得しておりますが、身近に感じないと動けないというのが現状です。2年前から環境を意識した活動を行うことを意識し始めました。千葉大学西千葉キャンパスで作業している従業員33人が話し合いを行い、環境への取り組みについて自分たちができることを考え、それを実行しています。具体的に行っている活動は、以下の通りです。

- ① 洗剤や漂白剤、トイレクリーナーを環境に優しいものにし、ごみを減らすため使い捨て容器の使用を止めた。また、大型容器も使い終わったらメーカーさんに引き取ってもらっている。
- ② 水をバケツに貯めて汚れたモップ、タオルなどをすすぐ。
- ③ ごみの回収時に缶、ビン、ペットボトルの分別ができているかを確認してから集積所に運ぶ。
- ④ マイボトルを持参する。
- ⑤ ワックスや洗剤は使い切ってから捨てる。
- ⑥ 定期清掃の際に出た汚水は決められた場所に捨てる。
- ⑦ 部屋の電気を消す。
- ⑧ トイレ掃除後にトイレの蓋を閉める。

今後もこの活動の徹底や新しい課題の発見・改善を行い、千葉大学の活動に協力していきたいです。

—千葉大学のかかわりについて教えてください。

千葉大学で建物などの清掃業務をさせていただくのは、今年で18年目になります。千葉大学のホームページなどを何度か拝見し、ISO14001やISO50001を取得して、学生を中心として大学全体で環境改善に積極的に取り組んでいるということが良くわかりました。今後も私たちに協力できることをやっていきたいと考えております。また、千葉大学内のより多くの人に環境ISO学生委員会が行っている活動について知ってもらうことで、よりよいキャンパスになると思っています。



インタビューの様子

編集担当：月山翠（理学部1年）、佐々木七菜（理学部2年）、松本梨花（工学部3年）